Tsukuba Psychological Research
2006, **31**, 45-57

「子の親に対するかかわり方」からみた心理的離乳への過程仮説

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科　池田　幸恭
筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科　大竹　裕子
筑波大学心理学系　落合　良行

A hypothesis concerning the process of psychological weaning from the perspective of the child's relation towards parents

Yukitaka Ikeda, Yuko Otake and Yoshiyuki Ochiai (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Tsukuba 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to propose a hypothesis concerning the process of psychological weaning from the perspective of how children perceive their relations towards parents. Three-hundred-and-one participants, ranging from junior-high school, high-school, university to graduate-school students, described their relations towards parents. Based on analyses of their responses, the following three hypotheses are proposed. (1) Nine types of relation towards parents were observed: 1- entrusting themselves to parents, 2- imitating parents, 3- relying on parents only when in trouble, 4- separating from parents, 5- deserting parents, 6- confronting parents, 7- accepting parents as an individual person, 8- sympathizing with parents, and 9- supporting parents. (2) Psychological weaning progresses according the above order. (3) The ninth stage represents the completion of the psychological weaning process, where the child and the parents depend on each other.

Key words: psychological weaning, child's relation towards parent, cognition, parent-child relations

問題と目的

心理的離乳とは，Hollingworth（1928）によって提出された概念である。Hollingworth（1928）は，生理的な離乳と対比させて，家族からの自立の過程を心理的離乳とよんだ。西平（1990）は，心理的離乳を第一次，第二次，第三次という段階に分けている。第一次心理的離乳とは，思春期から青年中期において親からの離脱，依存性の払拭に重点が置かれ，第二次心理的離乳とは，青年中期から青年後期において自律性の獲得に重点が置かれるものである（西平，1990）。そして，第三次心理的離乳とは，人間が本当の意味で自己実現を果たすために必要になる課題であるという（西平，1990）。また，落合（1995）は，親子間の心理的距離の大きさの変化に着目して，心理的離乳への５段階過程仮説を提唱している。すなわち，「１－親が子を手の届く範囲に置いて，子どもを抱え込み養う親子関係」，「２－親が子を目の届く範囲に置いて，子どもを危険から守る親子関係」，「３－親が，自分の目の届かない遠くに行ってしまった子どもの成長を念じる親子関係」，「４－親が子との距離を最も大きくとり，子どもと手を切る親子関係」，「５－子は子でありながら親になり，親は親でありながら子になる親子関係」とい

う5段階である。この仮説について，落合・佐藤（1996）は，実証的な検討を行っている。落合・佐藤（1996）は，6種類の親子関係を抽出し，落合（1995）によって提唱された仮説に類似した心理的離乳への5段階過程を見出している。すなわち，「1－親が子どもを抱え込む親子関係／親が子と手を切る親子関係」，「2－親が外界にある危険から子どもを守ろうとする親子関係」，「3－子どもである青年が困った時に，親が助けたり，励まして子どもを支える親子関係」，「4－子どもが親から信頼・承認されている親子関係」，「5－親が子どもを頼りにする親子関係」という5段階である。

ところで，親子関係には，「子の親に対するかかわり方」と「親の子に対するかかわり方」という「かかわり方の主体」に関する2つの側面がある。さらに，その2つのかかわり方を，「子がどのように認知しているか」と「親がどのように認知しているか」という「認知の主体」に関する2つの側面も存在する。そして，親子間の認知のズレについても問題になると考えられる。これらの側面を組み合わせて，親子関係を検討するための観点をTable 1に整理した。この整理をもとに，落合（1995）によって提唱された心理的離乳への5段階過程仮説と，落合・佐藤（1996）による実証的研究は，心理的離乳への過程について「親の子に対するかかわり方」を「子がどのように認知しているか」という観点から検討した研究であると位置づけることができる。それに対して，本研究では，心理的離乳への過程について，「子の親に対するかかわり方」を「子がどのように認知しているか」という観点から検討していくことにする（Table 1参照）。

これまでに，「子の親に対するかかわり方」を「子がどのように認知しているか」という観点から，親子関係について検討した研究として，次のような研究が挙げられる。井上（1975）は，青年の親に対する客観的な評価は，「信頼-批判-理解」というように発達的に変化することを指摘している。小高（1998）は，「青年の親への態度・行動」として，「f1親からのポジティブな影響の因子」，「f2親との対立の因子」，「f3親への服従の因子」，「f4親との情愛的絆の因子」，「f5　1人の人間として親を認知する因子」を抽出している。さらに，小高（1998）は，二次因子分析を行ない，「FⅠ親への親和志向の因子」，「FⅡ親からの客観的独立志向の因子」を抽出し，その高低の組み合わせによって，親子関係の4類型を提唱している。西平（1952，1990）は，青年の親への感情について，「愛の次元」と「力の次元」を見出しており，それらの2つ次元を2軸として，青年の親への態度を4分類している。親子関係における「愛の次元」とは「自己との共鳴，一致，近しさなどの親近感-疎遠感」を表しており，「力の次元」とは「社会化された評価，崇拝，批判など高い-低い，尊敬-軽蔑」を表している（西平，1990）。本研究では，以上の先行研究を参考にすると同時に，実際に子が認知している「子の親に対するかかわり方」に関する記述を青年から収集する。そして，収集された記述をもとにして，心理的離乳への過程について検討を行なう。

本研究の目的は，「子の親に対するかかわり方」を「子がどのように認知しているか」という観点から，心理的離乳への過程に関する仮説を提起することである。

方　法

＜調査回答者＞　回答を分析した調査回答者は，以下の通りである。宮崎県内の中学生71名（男性30名，女性41名，平均年齢13.31歳（SD＝1.24）），宮崎県内の高校生62名（男性31名，女性31名，平均年齢16.29歳（SD＝0.98）），茨城県内の大学生152名（男性49名，女性103名，平均年齢18.47歳（SD＝0.56）），茨城県内の大学院生16名（男性11名，女性

Table 1　親子関係を検討するための観点の整理

認知の主体＼かかわり方の主体	子の親に対するかかわり方	認知のズレ	親の子に対するかかわり方
子による認知	今回検討する観点	→ ← ギャップ	落合（1995）の心理的離乳への5段階過程仮説 落合・佐藤（1996）の心理的離乳への5段階過程
認知のズレ	↑↓ギャップ		↑↓ギャップ
親による認知		→ ← ギャップ	

５名，平均年齢24.94歳（SD＝1.61））。調査回答者は，全体で301名（男性121名，女性180名）であった。

＜調査時期＞　2005年７月。

＜調査内容＞　「子の親に対するかかかわり方」の認知に関する記述を幅広く収集するために，以下の３種類の質問文を呈示して，母親と父親について別々に記述を求めた。

（1）「日ごろ，あなたは自分の母親（父親）と，どのように接したり，かかわったりしていますか。」

（2）「日ごろ，あなたは，自分の母親（父親）に対して，どのようなことを思っていますか。」

（3）「あなたが，自分の親について，思ったり，考えたりしていることを自由にお書きください。」

各質問文に続けて，「わたしは母親（父親）____」という未完成の文章を複数呈示して，回答を求めた。なお，「母親（父親）」という書き出しでは，書きにくい場合は，「母親（父親）」を外して回答してもかまわないことを教示した。

＜分析手続き＞　収集された「子の親に対するかかわり方」の認知に関する記述を，以下の手続きで分類，整理した。

初めに，収集された記述を内容の類似度をもとに分類し，グループとしてまとめた。続いて，分類された各グループを整理して，子が認知する「子の親に対するかかわり方」のカテゴリーとして，さらにまとめた。

なお，収集された記述の内，「母親（父親）はやさしい」，「母親（父親）から送り迎えをしてもらう」などのように，子が認知する「子の親に対するかかわり方」には含まれないと考えられた記述は除外した。

結果と考察

1．「子の親に対するかかわり方」の認知に関する記述の整理

収集された「子の親に対するかかわり方」の認知に関する記述を分類，整理した結果をTable 2にまとめた。収集された記述は，44グループに分類された。さらに，分類された44グループを整理した結果，子が認知する「子の親に対するかかわり方」について，「子が親をたよりにするあり方」をもとにした，９種類のかかわり方が見出された。そして，それぞれの「子の親に対するかかわり方」について，「父親にかかわるあり方」と「母親にかかわるあり方」という２つのあり方が得られた。したがって，子が認知する「子の親に対するかかわり方」について，９×２の計18カテゴリーが見出された。各グループの記述例と記述数については，Appendixに整理した。

収集された記述を整理する上で，「43）親を信用している」というグループは，「親をたよりにするあり方」の「親をたよりにする」ということと，意味的に重複していると考えられた。そのため，Table 2の整理には含めなかった。また，「44）親に感謝している」というグループには，「親が家事をしてくれたことに感謝している」，「親が自分を応援してくれたことに感謝している」，「親が自分を育ててくれたことに感謝している」，「親が自分を生んでくれたことに感謝している」などの内容の違いがみられた。さらに，「44）親に感謝している」とは，「親をたよりにする」，あるいは「親をたよりにしてきた」ことを子が実感する中でみられるかかわり方であると考えられる。これらのことから，「44）親に感謝している」というかかわり方は，「親をたよりにするあり方」の各段階に対応する内容が存在すると考えられた。そのため，Table 2の整理には含めなかった。

以上のように，子が認知する「子の親に対するかかわり方」について，「子が親をたよりにするあり方」という観点が見出された。高橋（1968）は，「自立とは依存性のひとつの状態として記述しうる」として，依存性の発達について論じている。また，柏木（1998）は，親が高齢化した段階では，子の無能・未熟ゆえに成立した親から子への養育＝資源投資は，子から親へと，投資の方向が逆転することを指摘している。「子が親をたよりにするあり方」という観点は，これらの「依存性の発達（高橋，1968）」や「親子間の資源投資関係の逆転（柏木，1998）」という内容を検討する上でも有効であると考えられる。

また，各段階の「子の親に対するかかわり方」には，「父親にかかわるあり方」と「母親にかかわるあり方」の２つのあり方が得られた。ここでの「父親」と「母親」とは，実際の父親と母親のことだけではなく，心理的な意味での父性と母性も示している。すなわち，「父性」とは，「決断・区別」を基本的な機能とした，権威者，指導者，統制者としての親のあり方であり，親子関係における力関係で働くと考えられる。「子の親に対するかかわり方」の「父親にかかわるあり方」には，このような権威者，指導者，統制者としての親に対するかかわり方に，自らが父性を発揮していくことも含まれるといえる。一方の「母性」とは，「養うこと」を基本的な機能とした，養育者，支持者，保護者としての親のあり方であり，親子関係における愛情関係で働くと

考えられる。「子の親に対するかかわり方」の「母親にかかわるあり方」には，このような養育者，支持者，保護者としての親に対するかかわり方に，自らが母性を発揮していくことも含まれるといえる。

2．子が認知する「子の親に対するかかわり方」の概略

Table 2 に整理されたように，子が認知する「子の親に対するあり方」は，「子が親をたよりにするあり方」という観点をもとに，9種類に分けられ

Table 2　子が認知する「子の親に対するかかわり方」の整理

父親にかかわるあり方 ・権威者・指導者・統制者としての親に対するかかわり方 ・自ら父性を発揮するかかわり方 ・親子の力関係からみたかかわり方 （父性）	子が親をたよりにするあり方	母親にかかわるあり方 ・養育者・支持者・保護者としての親に対するかかわり方 ・自ら母性を発揮するかかわり方 ・親子の愛情関係からみたかかわり方 （母性）
助ける 40）親を助ける 41）親と対等にたよりあう	9　親をたよりにすると同時に親のたよりになり，子が親を 支える	**養う** 42）親の相談に乗る
尊重する 35）親を尊敬している 36）親を信頼している	8　親をたよりにすると同時に親のたよりになりたいとして，子が親を 思いやる	**いたわる** 37）親をいたわる 38）親は大切な存在であると思う 39）親に同情する
認める 31）親とは別個の人間である 32）親の苦労を理解する	7　親をたよりにできるかどうかにかかわらず，子が親を一人の人間として 理解する	**受容する** 33）親を受容する 34）この親でよかったと思う
越えようとする 28）親を乗り越えたいと思う	6　親をたよりにする関係の 変化を求める	**向き合おうとする** 29）親との関係を続けていきたい 30）親のことを理解したい
蔑視する 24）親を蔑視する 25）親に似ていることが嫌だ	5　親をたよりにしてもしかたがないとして，子が親を 見切る	**否定する** 26）親を否定する 27）親について考えることはない
批判する 14）親を批判する 15）親と対立する 16）親を信用していない 17）親に生理的嫌悪を抱く 18）力関係でのアンビバレントな気持ちを親に抱く	4　親をたよりにしたくないとして，子が親から 離れようとする	**距離を取る** 19）親との距離を取る 20）親に秘密を持つ 21）親が嫌い 22）親に反発する 23）愛情関係でのアンビバレントな気持ちを親に抱く
助けてもらう 12）困った時には親の助力を求める	3　困った時には親をたよりにして子が親に 頼む	**よりどころにする** 13）困った時には親に相談する
習う 7）親の期待に合わせて演じる 6）親の期待に合わせる 4）親から学ぶ 5）親をモデルにする	2　たよりになる理想的な親を子が まねる	**遊ぶ** 8）親と一緒に活動する 9）親が好き 10）親と会話する 11）親に友だちのようにかかわる
従う 1）親に従う	1　全面的に親をたよりにして，子が自分を親に 委ねる	**密着する** 2）親といっしょにいると安心する 3）親にかくしごとをしない

注1：「43）親を信用している」は，「親をたよりにするあり方」と意味的に重複すると考えられたため，表に含めなかった。

注2：「44）親に感謝している」は，「親をたよりにするあり方」の各段階に対応する内容がみられたため，表に含めなかった。

た。これらの子が認知する9種類の「子の親に対するかかわり方」に関する概略的な説明を，＜a＞として行なう。そして，＜b＞として各段階における「父親にかかわるあり方」について説明し，＜c＞として「母親にかかわるあり方」について説明する。

第1段階　全面的に親をたよりにして，子が自分を親に委ねるというかかわり方

＜a＞　人間の出産時の状態は「生理的早産(Portmann, 1951　高木訳　1961)」といわれるように，生まれたばかりの子どもは，他者の世話なしに生きていくことはできない。乳幼児期の子どもは，生きるために必要なものを，親をはじめとする周りの大人から与えられて生活している。子が必要としている食べ物や愛情などを，親が与えることを放棄すれば，その子が生きていくことは困難になるといえる。このように，子は親に自分の身を委ねて生活している。この段階の「子の親に対するかかわり方」は，乳幼児期に特徴的にみられるといえる。けれども，年齢的には既に乳幼児期ではない青年にも，このようなかかわり方がみられることもある。例えば，物事の決断を全て親任せにしている青年は，心理的には親を全面的にたよりにして，親に自分を委ねているといえる。

＜b＞　従う

第1段階の「父親にかかわるあり方」は，「従う」である。このあり方に含まれるグループは，「1）親に従う」である。具体的な記述として，「親に逆らえない」，「親の言うことは何でもきく」などがみられた。この段階の子にとって，親は自分の生死を左右する大きな力を持った存在であるといえる。また，この時期に，親からトイレットトレーニングを受けることで，子は社会生活ができるようになる。このように，親は強大な力を持って子を統制し，子は，そのような親に「従う」と考えられる。

＜c＞　密着する

第1段階の「母親にかかわるあり方」は，「密着する」である。このあり方に含まれるグループは，「2）親といっしょにいると安心する」，「3）親にかくしごとをしない」である。この段階の子にとって，親は自分の欲求を何でも満たしてくれる万能な存在であるといえる。乳幼児期の子は，泣くことによって，自分の欲求を親に伝えようとする。また，この時期の子は，親との間に愛着を形成していく。子は，親に「密着する」ことで，自分の欲しいものを手に入れて，安心して生活することができると考えられる。

第2段階　たよりになる理想的な親を子がまねるというかかわり方

＜a＞　児童期になると，子は親をモデルとして，親の姿をまねるようになる。Erikson（1959 小此木・小川・岩男訳 1973）は，児童期の子どもが両親に同一視することで，発達していくことを指摘している。この段階の子にとって，親とはたよりになる理想的な存在であるといえる。そのような理想的な親をまねることで，子は発達していくのである。

＜b＞　習う

第2段階の「父親にかかわるあり方」は，「習う」である。このあり方に含まれるグループは，「4）親から学ぶ」，「5）親をモデルにする」，「6）親の期待に合わせる」，「7）親の期待に合わせて演じる」である。この段階の子は，理想的な親のようになりたいと，親をモデルにして親に習おうとする。ここでは，そのような理想的な親の期待に合わせて，子が生きることもみられると考えられる。けれども，親の期待に合わせて生きていくことは，子が自分の本当の意志や思いを偽り，親に気に入られるような自分を演じることにつながってしまうという危険性もあるといえる。

＜c＞　遊ぶ

第2段階の「母親にかかわるあり方」は，「遊ぶ」である。このあり方に含まれるグループは，「8）親と一緒に活動する」，「9）親が好き」，「10）親と会話する」，「11）親に友だちのようにかかわる」である。この段階では，親と一緒に活動したり，会話をしたりして，子が親と「遊ぶ」ことが特徴的である。このように，親と「遊ぶ」中で親の姿をまねて，子は発達していくと考えられる。

第3段階　困った時には親をたよりにして子が親に頼むというかかわり方

＜a＞　子どもは，児童期を過ぎると，いつまでも親のそばにいて，親の言うことを聞いているだけではない。この段階の子は，全面的に親をたよりにはしない。いろいろな物事に対して，まずは自分の力でやってみようと取り組んでいく。そして，何か困ったことがあった時に，親をたよりにして，子は親に頼みごとをするのである。この段階は，子が自分の意志や目標を持って活動している時期に当たると考えられる。

＜b＞　助けてもらう

第3段階の「父親にかかわるあり方」は，「助けてもらう」である。このあり方の「12）困った時には親の助力を求める」というグループには，「親のアドバイスを参考にする」，「親に買ってもらいたい

ものをお願いする」などの記述がみられた。このように，この段階の子は，自分が困った時には，力を持っている親に，自分を助けてくれるように頼むと考えられる。

＜c＞　よりどころにする

第3段階の「母親にかかわるあり方」は，「よりどころにする」である。このあり方の「13）困った時には親に相談する」というグループには，「嫌なことがあった時に親に話をする」，「親に悩みごとを話す」などの記述がみられた。このように，この段階の子は，自分が困った時には，悩み，混乱した自分を情緒的に支えてくれることを親に求めていると考えられる。

第4段階　親をたよりにしたくないとして，子が親から離れようとするというかかわり方

＜a＞　青年期になると，子は自分の内面にも世界があることを発見する。いわゆる自我の発見である。この目覚めたばかりの内面の世界は，デリケートで非常に脆いものである。そのため，子は，親が自分の内面の世界に踏み込んでくることを防ぎ，その内面の世界を守ろうとするのである。さらに，この時期には親からの独立の欲求も高まる。これらのことから，子は親をたよりにしたくないとして，親から離れようとするのである。けれども，この段階の子は，親をたよりにせずに一人で生きていけるほど，心理的にも，社会的にもまだ準備ができていないことが多い。したがって，この段階では，「親をたよりにしたくない，けれども親にたよってしまう」というようなアンビバレントな心理状態が，特徴的にみられることも考えられる。

＜b＞　批判する

第4段階の「父親にかかわるあり方」は，「批判する」である。このあり方に含まれるグループは，「14）親を批判する」，「15）親と対立する」，「16）親を信用していない」，「17）親に生理的嫌悪を抱く」，「18）力関係でのアンビバレントな気持ちを親に抱く」である。この段階の子は，権威や力を持っている親をたよりにすることは，自分が親から自立していくことの妨げになると感じているといえる。そのため，親をたよりにしたくないとして，子が親を「批判する」というかかわり方を示すと考えられる。また，「17）親に生理的嫌悪を抱く」という記述は，父親に対するかかわり方に関する記述として，娘に特徴的にみられた。娘が父親に「生理的嫌悪」を多く示すのは，娘の中で育ってきた母性が，父親が象徴的に表す父性と対立するためではないかと考えられた。

＜c＞　距離を取る

第4段階の「母親にかかわるあり方」は，「距離を取る」である。このあり方に含まれるグループは，「19）親との距離を取る」，「20）親に秘密を持つ」，「21）親が嫌い」，「22）親に反発する」，「23）愛情関係でのアンビバレントな気持ちを親に抱く」である。青年期に入ると，子は親には言いたくないことを抱えたり，友人や恋人と一緒にいる姿は親には見せたくないと感じたりする。このように，子が親に秘密の世界を持つことが，青年期の始まりには起こるといえる。この段階の子は，そのような秘密の世界を，親から「距離を取る」ことで守ろうとしていると考えられる。

第5段階　親をたよりにしてもしかたがないとして，子が親を見切るというかかわり方

＜a＞　青年期を過ごす中で，子はやがて親の欠点に気づき，親も完全ではないことを知るようになる。そのような欠点を持った親をたよりにしてもしかたがないとして，子が親を「見切る」ことが起こると考えられる。小此木（1991）は，親離れとは「理想化していた親イメージについて，幻滅（脱錯覚）が生じて，親をありのままに見ることができるようになる体験である」と論じている。このような幻滅体験は，子が親を，たよりにならない情けない大人としてみなすことにもつながるといえる。落合（1995）は，「親が子との距離を最も大きくとり，子どもと手を切る親子関係」を提唱している。「親をたよりにしてもしかたがないとして，子が親を見切るというかかわり方」は，子の側から親との距離を最も大きくとるかかわり方であると考えられる。このような「親をたよりにしてもしがたないとして，子が親を見切るというかかわり方」は，親子関係の危機的な状態であるともいえる。けれども，このかかわり方は，子が理想的な親像から離れ，親との人間対人間の関係を築いていくことにつながるという側面も持っていることが指摘できる。

＜b＞　蔑視する

第5段階の「父親にかかわるあり方」は，「蔑視する」である。このあり方に含まれるグループは，「24）親を蔑視する」，「25）親に似ていることが嫌だ」である。「24）親を蔑視する」には，「親のようになりたくない」，「親に期待しても仕方がない」などの記述がみられた。以前は理想的なモデルであった親は，この段階の子にとって，情けない，力のない存在としてみなされているといえる。子は，そのような親を蔑んだり，親のようにはなりたくないと感じたりしていると理解できる。

＜c＞　否定する

第5段階の「母親にかかわるあり方」は，「否定する」である。このあり方に含まれるグループは，「26）親を否定する」，「27）親について考えることはない」である。「26）親を否定する」には，「親がいなくなればいい」，「どうしてこの人が自分の親なのかと思う」などの記述がみられた。このように，この段階の子は，親の存在を全面的に否定しようとする。そのことによって子は，自分と親とのつながりを断ち切ろうとしていると考えられる。

第6段階　親をたよりにする関係の変化を求めるというかかわり方

＜a＞　子は次第に，親をたよりにせずに自分自身の力で何とかやっていくことができるようになっていく。その時，子は親と向き合うだけの心理的な余裕を持つことができるといえる。この段階の子は，これまでの親との関係を見直し，親との関係を再構成していこうとして，親との関係の「変化を求める」というかかわり方をしていると考えられる。この段階は，親子関係における転換期に当たると考えられる。

＜b＞　越えようとする

第6段階の「父親にかかわるあり方」は，「越えようとする」である。このあり方の「28）親を乗り越えたいと思う」というグループには，「親に負けたくない」，「親よりも立派な人間になりたい」などの記述がみられた。この段階では，親よりも力や権威をもった立派な人間になりたいとして，子が親を乗り越えていこうとしているといえる。このことは，子と親の力関係が逆転していくことにつながっていくと考えられる。

＜c＞　向き合おうとする

第6段階の「母親にかかわるあり方」は，「向き合おうとする」である。このあり方に含まれるグループは，「29）親との関係を続けていきたい」，「30）親のことを理解したい」である。子にとって，親との関係は切っても切れないものであるといえる。この段階の子は，そのような親との関係を自覚し，その関係をよりよいものにしていこうと努力し親と向き合おうとしていると考えられる。

第7段階　親をたよりにできるかどうかにかかわらず，子が親を一人の人間として理解するというかかわり方

＜a＞　この段階に至る以前の「子の親に対するかかわり方」は，親をたよりにできるかどうかが，子にとって大きな問題になっていたといえる。けれども，この段階では，親をたよりにできるかどうかを，子は問題にはしていない。この段階の子は，親が自分の親であるだけではなく，自分と同じように悩み迷いながら人生を歩んでいる一人の人間であることを理解するようになっている。すなわち，この段階では，親と子の関係が，人間対人間の関係になっていくものとして理解できる。

＜b＞　認める

第7段階の「父親にかかわるあり方」は，「認める」である。このあり方に含まれるグループは，「31）親とは別個の人間である」，「32）親の苦労を理解する」である。これらの記述から，この段階の子は，親を自分とは違う人生を生きる個別の人間であることや，親のこれまでの苦労を認めるようになっていると考えられる。

＜c＞　受容する

第7段階の「母親にかかわるあり方」は，「受容する」である。このあり方に含まれるグループは，「33）親を受容する」，「34）この親でよかったと思う」である。親も人間である以上，完全であることはありえない。この段階の子は，そのような欠点を持った不完全な親を，一人の人間として受容する。そして，他の誰でもない親という人間が，自分の親であることを受け入れていると考えられる。

第8段階　親をたよりにすると同時に親のたよりになりたいとして，子が親を思いやるというかかわり方

＜a＞　青年期も終わりに近づくと，子は親をたよりにすると同時に親のたよりになりたいと願うようになると考えられる。けれども，この段階の子は，心理的にも，社会的にも，直接的に親のたよりになるだけの準備や能力はまだ十分でない場合が多い。そのような時期に子は，親のたよりになりたいという思いをせめて親に向けて，親を「思いやる」と考えられる。

＜b＞　尊重する

第8段階の「父親にかかわるあり方」は，「尊重する」である。このあり方に含まれるグループは，「35）親を尊敬している」，「36）親を信頼している」である。この段階の子は，親の立場や生き方を「尊重」して，親にかかわっているといえる。この段階では，子にとって，親とは，一度失った権威や力を再び取り戻した存在であると考えられる。

＜c＞　いたわる

第8段階の「母親にかかわるあり方」は，「いたわる」である。このあり方に含まれるグループは，「37）親をいたわる」，「38）親は大切な存在である

と思う」,「39）親に同情する」である。この段階の子は，親のことを心配したり，親に配慮したりする。このことは，子が親からの愛情を一方的に求めるだけではなく，自分から親に愛情を向けることができるようになったと考えられる。

第9段階　親をたよりにすると同時に親のたよりになり，子が親を支えるというかかわり方

＜a＞　第8段階では，子は親のたよりになりたいと願ってはいたが，直接的に親のたよりになることは，できていなかった。この第9段階では，子は親をたよりにすると同時に親のたよりになり，親を実際に「支える」のである。この段階の親子関係は，親と子が互いにたよりあう関係であるともいえる。このようなかかわり方は，子が心理的にも安定し，社会的にも力を持つようになった，青年期以降の成人期に特徴的に現れてくると考えられる。この第9段階が，子が心理的離乳を遂げた状態であると理解できる。

＜b＞　助ける

第9段階の「父親にかかわるあり方」は，「助ける」である。このあり方に含まれるグループは，「40）親を助ける」,「41）親と対等にたよりあう」である。この段階の子は，物理的にも，情緒的にも，親を「助ける」ということが考えられる。子は，自分も力や権威を持った存在として，親を助け，時には親を導いていくこともみられるであろう。このように，この段階の子は，自らが親に対して「父性」を発揮していると考えられる。

＜c＞　養う

第9段階の「母親にかかわるあり方」は，「養う」である。このあり方の「42）親の相談に乗る」というグループには，「親の相談に乗る」,「親の話を聞く」などの記述がみられた。この段階には，子が親の相談に乗るだけはなく，より直接的に親の世話をしたり，親を養ったりするというかかわり方も含まれると考えられる。そのように，この段階の子は，自らが親に対して「母性」を発揮していると考えられる。

3．子が認知する「子の親に対するかかわり方」からみた心理的離乳への過程に関する仮説

子が認知する「子の親に対するかかわり方」に関する記述を整理した結果をもとに，「子の親に対するかかわり方」を「子がどのように認知しているか」という観点から，心理的離乳への過程に関する次の3つの仮説が提起された。

（1）子が認知する「子の親に対するかかわり方」は，「子が親をたよりにするあり方」という観点から分析することが有効であり，この観点をもとに次の9種類に分けられる。

1-全面的に親をたよりにして，子が自分を親に委ねるというかかわり方
2-たよりになる理想的な親を子がまねるというかかわり方
3-困った時には親をたよりにして，子が親に頼むというかかわり方
4-親をたよりにしたくないとして，子が親から離れようとするというかかわり方
5-親をたよりにしてもしかたがないとして，子が親を見切るというかかわり方
6-親をたよりにする関係の変化を求めるというかかわり方
7-親をたよりにできるかどうかにかかわらず，子が親を一人の人間として理解するというかかわり方
8-親をたよりにすると同時に親のたよりになりたいとして，子が親を思いやるというかかわり方
9-親をたよりにすると同時に親のたよりになり，子が親を支えるというかかわり方

（2）心理的離乳は，上記の9つの順に経過していく。

（3）心理的離乳を遂げた状態とは，第9段階の「親をたよりにすると同時に親のたよりになり，子が親を支える」という状態である。すなわち，「子の親に対するかかわり方」が，一方的に親をたよりにするかかわり方から，親を一人の人間として理解するかかわり方を経て，親をたよりにすると同時に親のたよりになるかかわり方に至り，心理的離乳は遂げられる。

落合（1995）は，心理離乳を遂げた状態とは，心理的に，子が子でありながら親になり，親は親でありながら子になった状態であると論じている。本研究では，その状態に至る過程において，子は親に，親でありながら一人の人間としてかかわる状態があると考えられた。

上記の心理的離乳への過程に関する3つの仮説の他に，子が認知する9種類の「子の親に対するかかわり方」は，3種類ずつ，さらに大きく3つにまとめられるのではないかと考えられた（Table 3参照）。ここでは，次のような「子の親に対するかかわり方」の変化が考えられる。初めに，子が発達していくために「父性」と「母性」の働きを必要として，「Ⅰ父性・母性を求める」というかかわり方がみられる。続いて，子が発達するにつれて，今までのように「父性」と「母性」を享受するだけでよい

のか，過剰な「父性」と「母性」は自分の自立を妨げるのではないかというように，「Ⅱ父性・母性を問い直す」ことがみられるようになる。さらに，子は葛藤や模索の末，一方的に親に「父性」と「母性」を求めるだけでなく，「Ⅲ父性・母性を自ら発揮する」というかかわり方を親に示すようになると考えられる。

また，仮説として提起された，子が認知する9種類の「子の親に対するかかわり方」について，落合（1995）が提唱した心理的離乳への5段階過程仮説との対応も考えられた。落合（1995）は，親子間の心理的距離の大きさをもとに，子が認知する「親の子に対するかかわり方」を分類している。したがって，親子間の心理的距離の大きさをもとに，本研究で提起された子が認知する9種類の「子の親に対するかかわり方」と，落合（1995）によって提唱された「親の子に対するかかわり方」との対応について，Table 4に整理した。ここでは，子が認知する「子の親に対するかかわり方」と「親の子に対するかかわり方」との認知のズレが問題になると考えられる。例えば，子は「親をたよりにしたくないとして，子が親から離れようとするというかかわり方」を，自分の親に対するかかわり方として認知している。それに対して，「親が子を目の届く範囲に置いて，子どもを危険から守る」というかかわり方を親はしていると，子が認知する。そのような時，子は，親を自分の成長を妨げ阻害する存在であると思うと考えられる。落合（1995）が指摘するように，

Table 3　子が認知する9種類の「子の親に対するかかわり方」の整理

1-全面的に親をたよりにして，子が自分を親に**委ねる**	Ⅰ　父性・母性を求める
2-たよりになる理想的な親を子が**まねる**	
3-困った時には親をたよりにして子が親に**頼む**	
4-親をたよりにしたくないとして，子が親から**離れようとする**	Ⅱ　父性・母性を問い直す
5-親をたよりにしてもしかたがないとして，子が親を**見切る**	
6-親をたよりにする関係の**変化を求める**	
7-親をたよりにできるかどうかにかかわらず，子が親を一人の人間として**理解する**	Ⅲ　父性・母性を自ら発揮する
8-親をたよりにすると同時に親のたよりになりたいとして，子が親を**思いやる**	
9-親をたよりにすると同時に親のたよりになり，子が親を**支える**	

Table 4　子が認知する「子の親に対するかかわり方」と落合（1995）による心理的離乳への5段階過程仮説との対応

子が認知する「子の親に対するかかわり方」	子が認知する「親の子に対するかかわり方」（落合，1995）
1-全面的に親をたよりにして，子が自分を親に**委ねる**	①親が子を手の届く範囲に置いて，子どもを抱え込み養う
2-たよりになる理想的な親を子が**まねる**	②親が子を目の届く範囲に置いて，子どもを危険から守る
3-困った時には親をたよりにして子が親に**頼む**	
4-親をたよりにしたくないとして，子が親から**離れようとする**	③親が，自分の目の届かない遠くに行ってしまった子どもの成長を念じる
5-親をたよりにしてもしかたがないとして，子が親を**見切る**	④親が子どもとの距離を最も大きく取り，子どもと手を切る
6-親をたよりにする関係の**変化を求める**	（親でありながら一人の人間となる）
7-親をたよりにできるかどうかにかかわらず，子が親を一人の人間として**理解する**	
8-親をたよりにすると同時に親のたよりになりたいとして，子が親を**思いやる**	⑤子は子でありながら親になり，親は親でありながら子になる
9-親をたよりにすると同時に親のたよりになり，子が親を**支える**	

「いい親子関係は，子どもの発達とともに変化する」必要があるといえる。すなわち，心理的離乳を遂げるためには，子が変わっていくだけではなく，親もまた変わっていく必要がある。子と親の双方が，心理的離乳を進めていくために努力をしていくことが，親子関係においては大切であるといえる。

今後は，本研究において提起された「子の親に対するかかわり方」を「子がどのように認知しているか」という観点からみた心理的離乳への過程に関する仮説を確かめる必要がある。さらに，Table 1に整理された，親子関係を検討するための「かかわり方の主体」と「認知の主体」という観点を合わせて，心理的離乳への過程を解明していくことが課題である。

要　約

本研究の目的は，「子の親に対するかかわり方」を「子がどのように認知しているか」という観点から，心理的離乳への過程に関する仮説を提起することである。そのため，中学生，高校生，大学生，大学院生の計301名から，「子の親に対すかかわり方」の認知に関する記述を収集した。収集された記述を整理した結果，「子の親に対するかかわり方」を「子がどのように認知しているか」という観点から，心理的離乳への過程に関する次の3つの仮説が提起された。

（1）子が認知する「子の親に対するかかわり方」は，「子が親をたよりにするあり方」という観点から分析することが有効であり，この観点をもとに次の9種類に分けられる。

1-全面的に親をたよりにして，子が自分を親に委ねるというかかわり方
2-たよりになる理想的な親を子がまねるというかかわり方
3-困った時には親をたよりにして，子が親に頼むというかかわり方
4-親をたよりにしたくないとして，子が親から離れようとするというかかわり方
5-親をたよりにしてもしかたがないとして，子が親を見切るというかかわり方
6-親をたよりにする関係の変化を求めるというかかわり方
7-親をたよりにできるかどうかにかかわらず，子が親を一人の人間として理解するというかかわり方
8-親をたよりにすると同時に親のたよりになりたいとして，子が親を思いやるというかかわり方
9-親をたよりにすると同時に親のたよりになり，子が親を支えるというかかわり方

（2）心理的離乳は，上記の9つの順に経過していく。

（3）心理的離乳を遂げた状態とは，第9段階の「親をたよりにすると同時に親のたよりになり，子が親を支える」という状態である。すなわち，「子の親に対するかかわり方」が，一方的に親をたよりにするかかわり方から，親を一人の人間として理解するかかわり方を経て，親をたよりにすると同時に親のたよりになるかかわり方に至り，心理的離乳は遂げられる。

引用文献

Erikson, E.H, (1959). *Identity and the life cycle*. Selected papers. In psychological issues. Vol.1. New York: International Universities Press.
（エリクソン，E.H.　小此木啓吾・小川捷之・岩男寿美子（訳）（1973）．自我同一性　アイデンティティとライフサイクル　誠信書房）

Hollingworth, L.S. (1928). *The psychology of the adolescent*. New York: Appleton.

井上健治（1975）．独立への欲求とおとなに対する抵抗　井上健治・柏木恵子・古沢頼雄（編）青年心理学－現代に生きる青年像　有斐閣，Pp.235-250.

柏木恵子（1998）．社会変動と家族発達　子どもの価値・親の価値　柏木恵子（編）結婚・家族の心理学　－家族の発達・個人の発達－　ミネルヴァ書房，Pp.5-50.

小高　恵（1998）．青年期後期における青年の親への態度・行動についての因子分析的研究　教育心理学研究，**46**，333-342.

西平直喜（1952）．青年－両親関係の心理学的研究　野間教育研究所紀要　第7集.

西平直喜（1990）．成人になること－生育史心理学から　東京大学出版会.

落合良行（1995）．心理的離乳への5段階過程仮説　筑波大学心理学研究，**17**，51-59.

落合良行・佐藤有耕（1996）．親子関係の変化からみた心理的離乳への過程の分析　教育心理学研究，**44**，11-22.

小此木啓吾（1991）．親イメージの幻滅と回復　青年心理，**87**，136-145.

Portmann, A. (1951). *Biologische Fragmente zu einer Lehre vom Menschen*. Basel: B. Schwab.
（ポルトマン，A. 高木正孝（訳）（1961）．人間は

どこまで動物か　岩波書店）
高橋恵子（1968）．女子青年における依存性の発達　依田　新（編）現代青年の人格形成　金子書房，Pp.21-44.

（受稿９月29日：受理10月26日）

Appendix 「子の親に対するかかわり方」の認知に関する各グループの記述例と記述数

グループ名と記述例		記述数								合計
		中学生		高校生		大学生		院生		
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
1-全面的に親をたよりにして，子が自分を親に委ねるというかかわり方										
従う（父親にかかわるあり方）										
1）親に従う	父	9	8	5	5	6	14	1	2	50
・親には逆らえない	母	0	5	1	2	2	13	1	1	25
密着する（母親にかかわるあり方）										
2）親といっしょにいると安心する	父	1	4	2	2	2	4	0	1	16
・親といると落ち着く	母	6	26	8	13	10	46	0	6	115
3）親にかくしごとをしない	父	0	0	0	0	1	0	0	0	1
・親には何でも話す	母	1	7	0	3	4	17	0	0	32
2-たよりになる理想的な親を子がまねるというかかわり方										
習う（父親にかかわるあり方）										
4）親から学ぶ	父	0	2	0	1	2	8	0	0	13
・親から学ぶことが多い	母	2	1	0	0	1	4	0	0	31
5）親をモデルにする	父	8	13	8	6	8	27	4	3	77
・親のようになりたい	母	2	17	0	9	6	26	0	2	62
6）親の期待に合わせる	父	0	5	2	1	2	5	1	1	17
・親の期待に応えようとする	母	4	8	3	0	7	12	1	0	35
7）親の期待に合わせて演じる	父	0	0	0	0	0	6	0	0	6
・いい子でいたい	母	0	0	0	0	1	4	0	0	5
遊ぶ（母親にかかわるあり方）										
8）親と一緒に活動する	父	16	25	8	11	13	59	2	7	141
・親と出かける	母	3	21	1	11	4	45	0	5	90
9）親が好き	父	1	11	2	14	3	35	2	7	75
・親と仲がいい	母	6	21	1	19	11	82	4	4	148
10）親と会話する	父	11	15	12	16	15	37	3	7	116
・親に毎日の出来事を話す	母	7	18	7	14	21	50	12	6	135
11）親に友だちのようにかかわる	父	0	0	0	0	2	0	0	0	2
・親を友だちのように思う	母	0	4	0	0	3	17	0	0	24
3-困った時には親をたよりにして子が親に頼むというかかわり方										
助けてもらう（父親にかかわるあり方）										
12）困った時には親の助力を求める	父	0	3	1	3	7	30	2	1	47
・親のアドバイスを参考にする	母	0	2	3	3	5	24	0	1	38
よりどころにする（母親にかかわるあり方）										
13）困った時には親に相談する	父	1	1	0	2	1	5	0	0	10
・嫌なことがあった時に親に話をする	母	2	16	1	5	6	28	0	4	62

グループ名と記述例		記述数 中学生 男性	中学生 女性	高校生 男性	高校生 女性	大学生 男性	大学生 女性	院生 男性	院生 女性	合計
4-親をたよりにしたくないとして，子が親から離れようとするというかかわり方										
批判する（父親にかかわるあり方）										
14）親を批判する	父	8	18	6	8	6	38	1	0	85
・親の欠点を批判する	母	8	10	6	2	10	34	4	1	75
15）親と対立する	父	2	10	2	3	2	6	0	1	26
・親とケンカをする	母	3	5	3	7	2	17	2	0	39
16）親を信用していない	父	1	6	0	0	1	5	1	0	14
・親を信用していない	母	2	1	3	2	2	4	1	0	15
17）親に生理的嫌悪を抱く	父	0	4	1	2	1	3	0	0	11
・親が気持ち悪いと思う	母	0	0	0	0	0	0	0	0	0
18）力関係でのアンビバレントな気持ち	父	1	1	0	0	0	1	0	0	3
を親に抱く	母	0	0	2	2	0	1	0	0	5
距離を取る（母親にかかわるあり方）										
19）親との距離を取る	父	14	36	15	22	32	75	7	7	208
・親と一緒にいたくない	母	18	17	31	10	30	37	5	4	152
20）親に秘密を持つ	父	4	8	2	2	0	4	1	0	21
・親には話せないこともある	母	4	9	2	0	3	7	0	1	26
21）親が嫌い	父	9	12	1	9	8	21	0	0	60
・親が嫌いだ	母	6	16	5	8	1	5	0	2	43
22）親に反発する	父	3	8	2	2	0	10	0	0	25
・親に苛立ちを感じる	母	0	2	0	3	2	6	0	0	13
23）愛情関係でのアンビバレントな気持	父	0	1	1	1	0	0	0	0	3
ちを親に抱く	母	0	3	2	4	0	2	0	0	11
5-親をたよりにしてもしかたがないとして，子が親を見切るというかかわり方										
蔑視する（父親にかかわるあり方）										
24）親を蔑視する	父	4	9	3	3	15	14	1	1	50
・親には期待しても仕方がない	母	1	0	0	1	0	4	0	1	7
25）親に似ていることが嫌だ	父	0	0	1	0	0	1	1	0	3
・親に似ている所が嫌いだ	母	0	0	0	0	0	1	0	0	1
否定する（母親にかかわるあり方）										
26）親を否定する	父	3	13	0	1	0	5	0	0	22
・親はいない方がいい	母	1	6	0	0	2	2	0	0	11
27）親について考えることはない	父	0	0	1	0	2	0	2	0	5
・親について考えることはない	母	2	0	0	0	0	0	1	0	3
6-親をたよりにする関係の変化を求めるというかかわり方										
越えようとする（父親にかかわるあり方）										
28）親を乗り越えたいと思う	父	1	0	2	0	6	1	1	0	11
・親に負けたくない	母	0	1	0	0	0	0	0	0	1
向き合おうとする（母親にかかわるあり方）										
29）親との関係を続けていきたい	父	0	1	1	3	0	17	0	0	22
・親ともっと話すようにしようと思う	母	0	0	0	0	3	10	1	0	14
30）親のことを理解したい	父	0	0	0	1	0	0	0	0	1
・親の考えを理解したい	母	0	6	2	0	0	5	0	0	13

グループ名と記述例		記述数								
		中学生		高校生		大学生		院生		合計
		男性	女性	男性	女性	男性	女性	男性	女性	
7-親をたよりにできるかどうかにかかわらず，子が親を一人の人間として理解するというかかわり方										
認める（父親にかかわるあり方）										
31）親とは別個の人間である	父	0	0	0	0	0	0	3	0	3
・親と私は別の人間である	母	0	0	1	0	0	0	1	5	7
32）親の苦労を理解する	父	1	3	4	3	3	9	1	0	24
・親は大変だったと思う	母	4	10	4	2	12	17	4	0	53
受容する（母親にかかわるあり方）										
33）親を受容する	父	0	0	1	0	1	3	0	0	5
・親は今のままでいい	母	0	2	0	0	3	4	0	0	9
34）この親でよかったと思う	父	1	3	0	2	3	4	0	3	16
・この親が自分の親でよかった	母	3	4	0	0	11	11	0	1	30
8-親をたよりにすると同時に親のたよりになりたいとして，子が親を思いやるというかかわり方										
尊重する（父親にかかわるあり方）										
35）親を尊敬している	父	5	10	6	4	19	21	3	3	71
・親は自分の誇りだ	母	3	9	3	6	15	36	1	6	79
36）親を信頼している	父	0	0	0	1	1	3	3	1	9
・親を信頼している	母	0	1	0	3	3	14	2	1	24
いたわる（母親にかかわるあり方）										
37）親をいたわる	父	1	3	2	4	13	39	12	11	85
・親のことを心配する	母	2	5	2	5	7	37	13	8	79
38）親は大切な存在であると思う	父	0	3	4	1	2	4	0	2	16
・親は大切な存在だ	母	0	5	6	2	3	8	0	0	24
39）親に同情する	父	0	0	0	0	0	6	0	1	7
・親のことがかわいそうだと思う	母	0	0	0	0	0	6	1	0	7
9-親をたよりにすると同時に親のたよりになり，子が親を支えるというかかわり方										
助ける（父親にかかわるあり方）										
40）親を助ける	父	0	0	0	0	1	0	2	1	4
・親に助言する	母	0	3	0	2	3	4	3	6	21
41）親と対等にたよりあう	父	0	0	0	0	0	0	1	0	1
・親と相談し合う	母	0	0	0	0	1	1	0	0	2
養う（母親にかかわるあり方）										
42）親の相談に乗る	父	0	0	0	0	0	1	0	1	2
・親の話を聞く	母	0	0	0	0	2	8	0	0	10
今回の整理に含めなかったグループ										
43）親を信用している	父	0	0	3	1	1	2	0	0	7
	母	3	8	7	5	10	19	1	1	54
44）親に感謝している	父	0	3	4	2	9	14	3	0	35
	母	3	5	8	3	18	18	9	2	66
合計	父	105	239	102	136	188	537	58	61	1426
	母	96	274	112	146	224	686	67	68	1673